

「被害」の語りのアーカイビング——実践と、実践のための論理

Archiving Narratives of victims: A Logic of/for Practice

山口真紀 (立命館大学大学院先端総合学術研究科 一貫制博士課程)

「被害」をこうむった人々の社会的包摂に向けて、何がなされてきたらうか。ひとつの大きな向きとして、特に近年、災害の被災者や理不尽な事件の被害者の体験を収集・保存する動きが様々な形で生起している。本報告は「被害」の語りをアーカイビングしていくような実践と、それを支える論理について考察する。「被害」をめぐる資料収集・保存活動の実際の意義とは、第一に、出来事に際して人々が現実にとった行動の第一次的資料となること。第二に「被害」の多角的側面の解明。第三に、人々の経験や主観的な意味づけから歴史的・社会的「現実」を抽出することの可能性が挙げられる。報告では村上春樹の『アンダーグラウンド』(1997年)を「被害」の語りの収集・発信の実践として位置づけ、上記の意義と照らしながら分析すると同時に、そうした実践を支える論理を整理する。以上の作業は、「被害」をめぐる支援の理論的基盤構築の一助となるだろう。

(「インクルーシブ社会に向けた支援の<学=実>連環型研究」基礎研究チーム)